発掘新聞

11月12日号
平成25年度第6号

編集・発行
九州歴史資料館
電話　0942-75-9575

じぇ!じぇ!!じぇ!!!

宮地支局長福島復興支援レポート2

東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のため、福岡県から福島県に宮地聡一郎氏（発掘新聞福島支局長）を派遣中。

発掘新聞福島支局長
宮地聡一郎技術主査

宮地支局長が福島県に派遣され早くも半年が過ぎた。日々奮闘する支局長から、福島県の今についてのレポートが届いた。

奇跡の一本松復活！

テレビや新聞などでご存じの方も多いと思うが、岩手県陸前高田市の「奇跡の一本松」の、現地保存工事が無事終了した。

元々は高田松原として海岸線に7万本の松林があったが、津波によって1本だけ残ったものである。その一本松も結局は枯死してしまったが、「復興のシンボル」として残したいという地域住民の想いもあり、本体が樹脂により保存されることとなった。連日、訪れる多くの見学者に勇気を与えてくれている。

モニュメントとして復活！「奇跡の一本松」

一方、宮城県気仙沼市にある津波で打ち上げられた大型船については、保存か撤去かで議論されたが、「津波を思い出して辛い」という意見が多く、結局撤去されることとなった。同じ震災によってもたらされたものでも全く逆の結果となったが、最終的には地域住民の意向が最大限に尊重されるべきであろう。このような震災の痕跡には、過去の災害を物語るものとして未来の防災に寄与する役割もある。

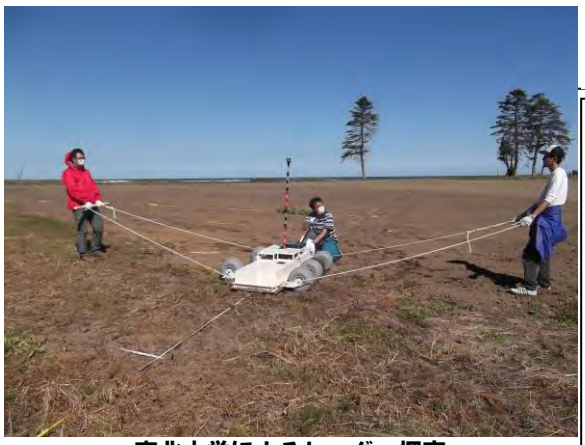
遺跡から過去の震災の跡!?

復興事業に伴う文化財調査でも過去の人達が災害にどう向き合っていたかを知ることのできる興味深い事実が分かってきた。

仙台市の発掘調査で弥生時代と平安時代の大きな津波痕跡が見つかった。各時代の遺跡の分布と照らし合わせてみると、津波の被害にあってからしばらくは高台上に遺跡が移り、その後低地に降りてきて、また津波の被害にあうと高台に移る、といったことを繰り返している様子が分かってきた。この事実は今後の復興の在り方を考えるうえで大変参考になることだろう。このように、震災復興に伴う文化財調査が将来の防災に貢献できることがわかったのも発見の一つである。

また、復興が急がれる中で迅速な発掘調査を行うために様々な取組みが行われている。先日はその試みとして、奈良文化財研究所による磁気探査、東北大学による地中レーダー探査が行われた。地中の様子をあらかじめ調べて試掘調査の効率化を図ろうとする狙いだが、まだ技術的な限界や課題も多く、それぞれの長所を理解した上でうまく使っていくことが必要だろう。

（宮地支局長）



東北大学によるレーダー探査

復興の今・未来を追う

9月から被災3県への派遣職員が9名増え、福岡県内の市町からも文化財専門職員が東北3市に新たに派遣され、震災復興事業に伴う文化財調査に奮闘している。

大震災から2年半、復興が遅れているというニュースをよく耳にするが、文化財調査のために遅れているといった報道は最近少なくなりつつある。

東北3県の震災復興事業に伴う文化財調査は来年度がピークになると予想され、今後も全国からの派遣職員をはじめ関連機関の力も借りながら、オールジャパンの体制で調査を進めていきたい。